

=市史編さん便り= 【32号】 令和4年9月20日(火) 発行.

*****土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

◎「第2回土佐清水市史編集委員会」を実施！

【日時】10月21日(金) 14:00～16:00

【場所】土佐清水市立中央公民館・2階会議室

上記の日時・場所において、「第2回土佐清水市史編集委員会」を開催させていただきます。この便りとともに該当の市史編集委員各位並びに委託業者担当者宛に依頼文書を同封しておりますのでご確認ください。なお、旅費と報償費の支給に該当する編集委員の皆様は、印鑑を忘れずにご持参ください。支給は10月21日以降に指定した口座に振込となりますので、予めご承知おきください。

会議は、全体会(14:00～15:10)〈教育長挨拶・市史編さん状況報告・講話〉と個別協議(15:10～16:00)〈各編集委員の課題相談、校正状況の確認ほか〉の2部構成となります。全体会の講話は、第15章「動物」の海洋生物を執筆いただいた高知県立足摺海洋館 SATOUMI・新野大館長に「市域の海洋生物について」と題して講話をいただきます。

今回の会議は、市史執筆の課題や相談を中心に協議・研修を実施するため、市史編さん委員及び監修を除く市史編集委員各位の参加となります。

「第70回全国博物館大会」高知市で開催！

・・・11月17日午前中・第2分科会で土佐清水市教育委員会生涯学習課市史編さん室の取り組みを発表予定！

本年11月16日(水)から18日(金)までの3日間、「第70回全国博物館大会」が、メインテーマが「地域から発信する博物館の未来」のもと、高知県民文化ホールを主会場に他、高知市内2会場で開催されます。この大会が高知県で開催されるのは初めてとなり、公益財団法人日本博物館協会が主催し、こうちミュージアムネットワークが共催します。

今全国大会では、「改正博物館法施行(来年4月)の内容共有」と「連携・保存活用・運営を重要テーマとして協議」を軸に大会が開催されるようです。

これにあたって、大会2日目【11月17日(水)】の9:30～12:00に開催される第2分科会で土佐清水市教育委員会事務局を代表し、市史編さん室・田村が「休校を利用した地域資料の保存と活用」というテーマを掲げ、実践報告を行うようになっています。9:30～10:00頃に発表していると思います。

ちなみに、以下に第2分科会のコーディネーターと4人の事例報告者を掲載しておきます。会場は、高知県人権啓発センター(6階)となります。

- ◇コーディネーター **楠瀬慶太**(高知地域資料保存ネットワーク事務局・高知新聞記者)
- ◇報告1 **田村公利**(土佐清水市教育委員会生涯学習課市史編さん室長)
「休校を利用した地域資料の保存と活用」
- ◇報告2 塚本麻莉(高知県立美術館主任学芸員)
「『収集→保存 あつめてのこす』展を開催して」
- ◇報告3 谷地森秀二(越知町立横倉山自然の森博物館学芸員)
「高知県内の自然史資料の現状」
- ◇報告4 大河内智之(奈良大学准教授)
「社会的課題と博物館—人口減少社会の資料の守り手—」

なお、第1分科会は「連携・新たな博物館連携の可能性」、第2分科会は「保存と活用・文化行政の課題克服と文化資源の活用」、第3分科会は「運営・挑戦する地域の文化施設」とそれぞれのテーマを決めています、このテーマもとで分科会毎に4例の実践報告があり、コーディネーターを中心に課題について討議し、まとめていくことになります。

◎国指定文化財「松尾のアコウ自生地」〈大正10年3月3日指定〉

『土佐史談 277号』の表紙に国指定文化財の自生地の中で最大のアコウ樹を掲載し、表紙説明で「アコウの自生地である」と記した。このことに対して『高知県文化財ハンドブック』の記述を根拠に私の表紙説明の記述が誤りであるとの指摘を受けた。それは『ハンドブック』に「(天満宮) 境内に3株の大きなアコウがある」という記述を「最初に3株が指定されていた」と解釈し、「自生地ではなく、個々の木で指定されたのだ」という主張だ。

しかし、下の「大正10年3月3日官報」をご覧ください。きちんと「清松村あこう自生地」とある。「同縣幡多郡大字松尾字松ノ下(現在の高知県土佐清水市松尾松ノ下) 887 神地…」とあり、女川と天神川に挟まれた松尾漁港までの一帯の小字を「松ノ下」と呼び。その「887 神地…」、つまり現在の松尾天満宮周辺一帯が「国指定のアコウの自生地」ということになる。そこに育つアコウはすべて国の保護下となり、勝手に伐採などをしてはならないことを意味する。自生地であることは、既に『土佐清水市の指定文化財』(土佐清水市教育委員会)にも明記されており、「自生地」という記述が誤りではなかったことに安堵するとともに、事実確認は慎重にしなければならないことを今更ながらに感じたことであった。

